

- 志田 順, 1935: 気候の永年変化と東亜勢力の興亡盛衰, 科学知識, 15, 10.
 須田滝雄, 1966: 気候不順時代が来るか, 気象 (日本気象協会), 108, 2-6.
 —, 1974: 近年における世界の異常気象の実態調査とその長期見通しについて, 気象庁, 258-262,

262-264.

- , 1975: 火山噴火の気温低下に及ぼす影響について, 天気, 22, 431-435.
 北島正元, 1974: 幕藩制の苦悶, 日本の歴史, 18, 中央公論社, 406-408.



寺田 一彦著

海洋開発序説

講談社, 1975, 175頁, 1,300円

これは著者が大学の教養課程の学生に講義したものをもとにして高等学校の生徒にも読めるように書かれたものである。内容は海への旅, 海を持つ地球, 海をしらべる, 海上気象, 波浪と潮汐, 海洋開発への道の各章から成る。これからも分るように, かなり広い範囲のことが一冊の本に手ごろにまとめられ, まさしく海洋開発一海を知ること一入門書である。それに各章のおわりに数個ずつの演習問題も出ている。

速度の単位であるノットは紐の結び目の意味であるが, 昔の船乗りは紐の先に抵抗板のおもりをつけて船尾から流してその紐の出具合で船の速度を測ったが, その紐に結び目を47.25フィート毎につけておき, その結び目が28秒間に通りすぎていく数を数えたことからそう呼ばれるようになったとか, 天気図が最初に作られたころのヨーロッパ諸国の海上航路をめぐる政策上の背景とか, 等々の話が随所に見られるので読者を楽しませてくれる。

各章の内容を少しづつ紹介すると, 第1章は地球の誕

生, 海での生命の発生から人間と海までである。ヨーロッパ人が香料でひともうけしようとした事が急激な海への進出の動機となったことなど。第2章は太陽放射と地球の熱平衡, 印度洋の海流は夏と冬で季節風の影響でまきり反対になること, 水温と塩分の分布を軍事的に利用して潜水艦がうまく逃げた話など。第3章は海洋観測で, これを勉強すれば一応の観測ができるよう記述されている。第4章は海上気象である。海面蒸発がいろいろな面で重要な事, 台風域内に気流が最終的に収斂していく範囲は進行方向の右前面からのものが多いことなどを教えている。

第5章は波浪, 高潮, 津波, 潮汐で, 次の演習問題もある。「20m/secの暴風域を持つ台風がマリアナ諸島に発生した場合, 土用波はいつ頃日本沿岸に影響するか」また「起潮力はそれを起す天体の質量に比例し, 天体までの距離の3乗に反比例することを示せ」。それらの基礎となることがらが本文に説明されている。第6章には, 第一次大戦はその歴史的背景から日本にとって幾多の船成金を生み, この寄付金もあずかって神戸海洋気象台の誕生をもたらした話, クストーが若い頃から注いだ海への情熱, 最近のシーラブ計画等々, 海を持つエネルギーを取り出し発電をしている事や将来への夢, また海洋開発と国連の関係までが含まれている。

最後に, 現在は漁船からの気象や海洋資料が活用されているが, そうなるまでには著者の国際機関への働きかけによるところが大きかったと評者は聞いている。

(近藤純正)